



西日本新聞 文化欄

1988年九月二十六日～十月八日

福岡市美術館で開かれている「九州派展」(10月1日まで。月曜休館)が反響を呼んでいる。九州派は、一九六〇年前後にアンフォルメル(非定形) 絵画と奇 怪なオブジェを武器に「反芸術」を掲げて東京に殴り 込みをかけた福岡の前衛美術集団。安保闘争や三池争 議で日本中が揺れ動いた時代に爆発した彼らの行動は 本欄連載「駆け抜けた前衛九州派とその時代」に詳述した。あれから四半世紀が過ぎた。戦後美術に衝撃 を与えたかつての前衛たちは、あらしが去ったあと、 どう生きてきたのだろうか。延べ五十人に上ったメン バーのうち、今も「九州派」にこだわりながら精力的 に制作を続ける典型的な数人の軌跡を追ってみた。

渡米で大きく変わる

九州派は代表者がいない仲間たちの集まりだった。だが、両手を振り回し、泡を飛ばしてわめくうちに、自然に皆を納得させてしまうカリスマ的な力を持つひげの男、桜井孝身をだれもが親分だと認めていたようだ。

フランスに住んで十五年になるその桜井が、興奮している。例年だと夏に帰国して数都市で個展を開き、そそくさと引き上げるのだが、今年は早々と四月に福岡に来て、まだ帰らない。「九州派展」を成功させ、その勢いで新しい運動を引き起こそうという気構えさえぞかせる。「僕が世界を取る」と言い、芸術は個人の作家からしか生まれなことを九州派の運動を通して承知していながら、五カ月間精力的に動き回り、今はパフォーマンスを繰り返している。海外に住みながらも、商業主義に取り込まれた観のある日本の美術状況に我慢できないというのだろうか。

九州派展”を三度

九州派時代にアスファルトや砂を用いたアンフォルメル絵画や自動車のタイヤなどによるオ

ブジェを作った桜井が、昭和四十年の第一回渡米以降、大きく変わる。

離合集散を繰り返しながらも一応の団結を誇った九州派も三十年代後半には亀裂を隠せなくなっていた。前衛美術を我田引水的に強引に九州の文化に取り込もうとして果たせなかった桜井だが、「いまだかつて挫折したことがない」と豪語する、持ち前のしたたかさで、現代美術の中心にのし上がったアメリカに目をつけた。「オレの力を通用させる」と勤め先の会社を退職してサンフランシスコに向かった。

ここで、ペンキ塗りのアルバイトをしながら外国人の作家や浦田正夫(現東京都)らと第一回九州派展といえる「否定展」(四十一年)を主宰。一年遅れてやってきたオチ・オサム(福岡市)らと、九州から送ってきた作品を加えて第二回九州派展(四十二年)を開く。第三回展(四十三年)は、オチと浦田が、桜井の帰国中に行っている。桜井は、四十五年の二度目の渡米で、外国人詩人や音楽家も加えてコンニャク・コンミュンを始める。九州派やグループ運動への思い入れはアメリカでも続くのだ。

LSD で悟り開く

ヒッピーがまん延していた サンフランシスコは、桜井の芸術観を決定的に変えた。「LSD と宗教だった」。 LSD で幻の世界をさまよう。ヒンズー教のタントラ(天国への道を描いたマンダラ様の絵)に出会う。

「少女と牛がセックスする図を見てたまげた。ところが牛は神が変身した姿だった。そう知ると実に美しい」幻の世界と宗教を知って「絵は感動の表現だ。造形などくそくらえって思ったわけよ」。あっさりと抽象画を捨てる。最初の渡米の翌年だった。

「LSD でインスタントに悟りを開いた」桜井はヒンズー教の絵をコピーしながら、大きな目を持つ女性像を生み出す。花に囲まれた女だったり、背に翼を持つ天使だったり……現在も続く「パラダイスへの道」シリーズの始まりだった。「前衛もヨーロッパも念頭にない。宗教と精神を描いたのよ」。ヒッピーの「愛と平和」思想が下地にあった。

東洋的な雰囲気も

だが、やはりヨーロッパは気にかかった。「世界を取る」野心もまた、頭をもたげた。

「世界を取るには、ニューヨークかパリで通用させなければ。田舎者の考えだねえ」。で、四十八年にフランスへ。以来グループ「クスグリ」を結成して展覧会を開いたり、パリや東京、福岡での個展、サロン・ド・メー出品、パリの有力画廊との契約と、おう盛に活動を広げてきた。

無数にひしめく女たちが万歳したり、いくつもの目を持つ天使など赤と黒を主色にした強烈な画面の作品が多い。人間賛歌であり、一方で、天国への道はそう簡単ではないという懐疑でもあろう。東洋的な雰囲気も加え、新しい面を探っている。

「オレを越えろ」

「六十歳になっては恥ずかしいが、やっぱり世界を取りたい。のし上がりたい。B やりたいこ

